

いたとする。よって殷を中心とする方國聯盟はその實都市國家聯盟であり、集落の聯盟ではない。

その廣さについては、『史記』吳起傳の「殷紂の國、孟門を左にし、太行を右にし、常山は其の北に在り、大河は其の南を經る」と基本的に一致するとし、この範圍内に侯・田の「方」が建てられたとすれば、殷は方國としてはそれほど大きくないと考える。殷は實際のところ方國の形をとった王朝にすぎず、やや強大な方國聯盟を形成した王朝であった。殷滅亡の原因は、その重要な同盟國、周、鬼、鄂との關係が破綻して孤立したことにある。周は新たに強大な聯盟を組織し、本土の狭い商方を打ち倒したことによ

	武丁自組	武丁賓組	祖庚	祖甲尹群	廩辛康丁	武乙文丁	帝乙帝辛
人	𠄎 𠄎	𠄎 𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎 𠄎	𠄎
匕	𠄎	𠄎 𠄎 𠄎	𠄎 𠄎	𠄎	𠄎	𠄎 𠄎	𠄎
从	𠄎 𠄎	𠄎 𠄎	𠄎		𠄎	𠄎	𠄎
比	𠄎	𠄎 𠄎 𠄎 𠄎	𠄎		𠄎	𠄎 𠄎	𠄎

圖版（本論文表一より）

その後の春秋時代の争覇も、方國が林立する状況の中で新たな方國聯盟を結成しようとする試みであった。次第に方國を兼併して郡縣制度が採用されるようになる、國家組織が統一國家の形態に取って代わられることとなった。

以上、甲骨文の「比」字の解釋にとどまらず、方國聯盟のような古代の國家形態にまで議論が及んでいるのが魅力的な論考である。なお方國聯盟や當時の國家形態については林氏の「關於中國早期國家形式的幾個問題」など後續の論考で再檢當されている。また「比」字については後に劉源「殷墟「比某」卜辭補說」、『古文字研究』第二七輯、中華書局、二〇〇八年）が再檢當し、二者が會同、協力する意であるとし、二者の身分は固定されていないとする。現在はこちらの説が引用されることが多い。

（佐藤信弥）

眞該走出疑古時代嗎？——對當前中國古典學取向的看法

本稿は、二〇〇六年の學術報告を基礎に『史學集刊』（二〇〇七年三號）にて公刊したものであり、後に『林漢學文集』・『林漢文集』古史卷』にそれぞれ収録されている。

中國で古書や古史を研究する「古典學」は長い歴史を持つが、一九七〇年代以降の出土文字資料増加により研究の方向性が變化した。そのような状況を背景に、李學勤が一九九二年に「走出疑古時代（擬古時代から抜け出そう）」を提示し、學界に様々な反響を巻き起こした。著者はこれに対し、過去（一九九六年）に「疑古時代を抜け出

してもよいし、抜け出さなくてもよい」と述べているが、本稿はそれに更なる見解を加えてまとめたものとなる。

まず著者は、中国で「疑古」は長い伝統を有することを述べ、古史辨学派に至る疑古の歴史（初期の疑古は、儒家の古史観を前提に古書の疑義を提起したもの／一九二〇年代から始まった顧頡剛をはじめとする「古史弁派」による疑古思想の新潮流は、進化史観の指導の下で行われた）を整理する。ところが今日顧頡剛に言及する際、往々にして彼の「層累的に形成された中国古代史」の命題に重点を置き、彼が古書の偽造識別の際に抱いた根本的疑問「社会学・考古学の知識によって導き出された人類社会の発展段階と、従来提示されてきた古史との不整合に対する疑問」を無視してきたとする。

著者は、顧頡剛が提示した「打破」すべき四観念（①民族が同一根源より出自した・②地域が一統に向かう・③古史の人化観念・④古代が黄金世界であった）を、彼による伝統的古史観への決裂宣言書と認め、これ以降中国史学研究は「疑古時代」に入ったとする。さらに顧頡剛の研究方針を、マルクス主義的唯物史観からも正しく、今後中国古史研究で引き続き堅持すべきものと評価し、「疑古時代」の概念と方法論とが胡適・郭沫若等の後学に大きな影響を与えたと指摘する。

次に著者は、古史弁派が古書の弁偽を通じて古い古史観を批判し、方法論として史料の審査に専念したことを指摘し、その例として馮友蘭の言「現在の中国史研究の態度として信古・疑古・積古の三傾向があるが、信古は減び行くべきものである。そして歴史研究は、史料の徹底的調査（疑古）と融会貫通（積古）との二段階をへる必要がある」

（『古史弁』第六冊序）を引く。ところがこれが、後に李学勤によって「信古―疑古―積古」の三段階論として解釈され、「疑古時代を飛び出して積古時代に入るべきだ」と説く根拠となったと指摘する。著者はこれを、馮氏の発言を恣意的に引用して李学勤の見解を証言したものに過ぎないと批判する。

このように李学勤の見解に対する問題提起をしつつ、今日の中国史学界の状況について論を進める。ここでは考古学による新史料の大量発見により、伝世文献に対する新調査の必要性が引き起こされた。その一方、史料や文献に対する批判的調査を放棄し、融会貫通して「走出疑古時代」を提示する研究が現れ始めたとする。李学勤はそれらを踏まえて、「古代史の構築において史料が豊富になりつつある現状を鑑み、原文に対する批判的検証を放棄して融会貫通し、「走出疑古時代」とすべき」と主張したとする。

ただ著者は、李学勤が「走出疑古時代」を提案した後も、「積古」は「信古」に後退したわけではない・「伝世文献に対しては、より厳格・慎重な姿勢で研究を行うべき」との発言をしていることを踏まえ、彼が伝世文献に対する批判的姿勢を堅持する意識を持っていたとする。その一方、李学勤の「走出疑古時代」の「積古」についての発言「文献研究と考古研究を結びつけ」・「中国古代文明全体を再評価」を挙げ、著者は後者こそその核心とし、これこそが「走出疑古時代」を提唱する根本的な原因であると喝破する。

例えば李学勤は、伝世文献の系譜記述を注意深く検討し、中華文明の起源を黄帝に見出す発想には歴史的伝統があると指摘する。そして、

清末民国初期に革命派が使用した黄帝曆や現在でも使用される「五千年文明古国」などの表現を引用し、「(中国人は) 潜在意識の中で中国文明は黄帝から始まったと考えている」と述べる。それを受けて「民族の団結統一はわが国伝統文化の重要な特徴であり、このような民族精神は史前時期にすでに萌芽していた」と主張したとする。著者は、これら李学勤の主張が「中華を愛し統一を守る」ことから出発しており、それは顧頡剛の「四つの打破」とは真逆の発想であると指摘する。

著者自身は、黄帝を中華民族の長い歴史の象徴とすることには反対しない。一方、学術的観点から、黄帝は伝説上の人であって歴史上の人物ではなく、「積層による中国古代史」の中で徐々にその位置づけが変化したとし、古史弁学派が指摘するように、諸文献(『帝繫姓』・『五帝徳』など)に見える五帝の系譜や記述は戦国時代の各民族大融合の中で再結合されたもので、三代一系・黄帝一統などの荒唐無稽な歴史観は現代では淘汰された学説であるとする。

そして著者は、李学勤が中国への愛と統一への思いをきっかけとして、上記の考えをひっくり返そうと試みていると指摘する。李氏は古史弁派の方法論を「冤罪・偽審・誤審も多数含まれている」と批判する一方、出土文字資料を用いることで偽書認定を覆して古典籍の名譽を回復可能とする。著者はこれに対し、このような李氏の方法論では諸文献の内容に信憑性を増すことは不可能ではないかと疑問を呈する。

そして著者は、李学勤の古史弁派への批判と、彼が提示した「走出疑古時代」のための方法論について三点に分けて批判する。

まず一点目として、出土文献を利用して古書の名譽を回復する彼の方法論は、結局の所彼自身が古史弁派を批判する際に用いた「本で本を論ずる」行為そのものと指摘する。そして著者は、西周・殷代の古書を発見しない限り、古史弁派の指摘を客観的に批判できないが、李学勤はそれを挙げる事ができていない。また別に戦国竹簡や裘錫圭の研究を引用して戦国末期の『帝繫姓』・『五帝徳』が提示する五帝観が普遍的ではなかったとする見解を示し、その説を鋭く批判する。

次に二点目として、李氏が「地下から出土した簡帛によって、我々は古代の本を直接見ることができた結果、これで真偽を判別する問題はなくなった」と説く点を挙げる。著者は、(竹簡などの)出土文献は戦国時代人の見解にしか過ぎず、慎重な調査の必要性を主張する。そして、多元的に発生した中国新石器文化において中原が主導的地位となったのはその晩期とする蘇秉琦説、夏・商・周三代は異なる地域文化に起源を持つとする鄒衡説、更には、新石器時代以来の中国地域の人類を複数に区分可能とする朱泓説をとりあげ、これら客観的研究によって黄帝一統系譜は明確に否定されると批判する。

そして第三点として、李氏の「古書の形成に複雑な過程があるため、多くの古籍は真・偽の判断が難しい」との主張を挙げ、それは古代史の変化の複雑性を反映したものに過ぎないと批判する。そして顧頡剛の「層累的中国古代史」は、歴史典籍の豊富な古代国家において当然破ることができない史学思想であり、黄帝の実在を証明しようとするなどの古代中国文明の再評価の試みを感情的衝動によるものと断定し、李学勤の手法は科学研究とは完全に逆行したものと批判する。

このように著者は、李学勤の「走出疑古時代」宣言は私たちを前進させず、かえって信古時代に戻す行いであると鋭く批判する。更に、「走出疑古」に賛同する学者による疑古に対する批判について、学術面よりむしろ政治面から提起したと指摘する。

その例として、廖名春による「顧頡剛の「層累的に形成された中国古代史観」が日本の学者（白鳥庫吉）「堯舜禹抹殺論」の影響を受けたもので、中国の歴史に対する疑いを引き起こして中華民族の自尊心を動揺させた結果、愛国主義的感情が強い古史弁系学者がかえって侵略者に加担することになった」とする批判を引用し、また廖氏が「この問題で古史弁運動がどのような役割を果たしたか、深く考える価値がある」と強調したことをとりあげ、その証左とする。著者はこれに対し、顧頡剛は日本に不得手である一方、彼が取り組んだ北京大学図書館蔵書目録作成作業の中で「堯舜禹抹殺論」を目睹した可能性はあり得るとする。ただそのような関係性のみで、古史弁学派に罪名を被せる謂れないとする。

著者は、廖名春のような攻撃は、一九二九年に国民政府が顧頡剛が編集を担当した『中学校用本国史教科書』を焚禁にした際、国民党宣傳部部長の戴季陶が「中国が一体的に団結可能なのは、人民が一人の人物を祖先だと信じているからだ。三皇五帝を否定する言説は、このような認識を解体することだ」と論難したケースを思い出さざるを得ないと指摘する。本稿では、他にも政治的な観点からの歴史研究のバリエーションについての例を挙げているが、本提要では省略する。

著者は以上の検討を踏まえ、中国古典学の信古時代がまだ完全に終

わっておらず、その残滓が消え去らなければ、中国史学に悪影響を与える可能性がある」と結論づける。また、古史弁学派によって擬古時代の扉が開かれた後、疑古と積古が重なりあいつつ中国古史の再建が行われてきたのであり、文献史料に対する厳格な審査の精神を保ちつつ、文献と考古とを統合した研究を進める必要があると指摘する。そして「疑古時代から抜け出す」こと必要は全くなく、信古を復活させる方針は誤った導きであると述べる。

そして著者は最後に、我々はそもそも疑古時代を抜け出すべきではなく、信古時代の寿命を終えさせるためにも、積古の方針を重んじて真実の中国古史を再建する必要がある。この方針を祖宗としてこそ、後代に申し訳が立つと結ぶのである。

(山田崇仁)

古文字轉注舉例

六書の一つである轉注について實例を挙げて論じている。『林漢文集』文字卷および『林漢學術文集』中國大百科全書出版社一九九八年に所収。原載は『第三屆國際中國古文字學研討會論文集』香港中文大學、一九九七年。轉注については、拙論「轉注とは何か」（本誌第五號所収。目次は「轉注について」となっている）を参照されたい。その第二章に氏の論を引用紹介したので、今そのほぼ同文を再録する（補注を削り一部の語句を改めまた書き足した）。

六書について、戴震の四體二用說（『答江慎修先生論小學書』）や、朱駿聲『說文通訓定聲』轉注などに言及した後、朱駿聲も「音を表す